

多谷昇太

◆ 風吹かず ◆ (一)

脇腹にカラス入る夢見てしよりガンとなりしか衣
かへさぬに

いかにせば死のクルスより逃れるやガンの宣告負
ひかねてをり

たもつべき調和も知らずガン細胞わが生き様にそ
ひてあるらし

すね者はすこやかゆると知りもせずガンに伏せれ
ばこの弱きこと

貧窮の極まるときに病(いたつ)けば啄木憂ひ我と
知らるる

ともがきも備えもあらぬガン患者貧窮問答ここに
極まる

保証人ゐずば入院受けかぬと云はれて姉に久しき
電話

あさましき貧と病とのなれの果て面目なさに云は
むかたなし

窮らざばいつかいつかと猶予持ちおのれゆるびて
悔ひ改めまじ

窮ればあな白々し見栄もなく放蕩爺の帰るとすら
む

※聖書物語「帰って来た放蕩息子」に掛けた。 帰る先と
は神のもと。 困った時の…どころではない、生死場。

えいつ!!われは―中也、啄木 山頭火を継ぐ者なり、
免罪符持てり

(※ と、粋かつてはみて…)

人仕舞ひ終はこれかよ重病棟痛いぞ怖いぞ人間止めるぞ

こや重病棟(ここ)にまたも来むとは思はねどあざなふ縄の終りに来べし

病身はかくもおどしきむさごろも能はば替えむ、よし、替えてんや

※「病は氣から」ならば、その逆も。色心不二ならば…

悍しきや総身できものだらけなりビール菌みちて肌を侵せば

肉の身の鼻つくさまは終までも病(いたつき)とも逃げる術なし

四大苦は苦の序列かないたつきは痛、付きて、むべ最終苦控ふ

※生老病死を云う。この順番で苦しいだろうか？

あともなきガンの臥所にむすぼほれ明日死ぬると何をかすべき

とほしろき白亜の巨塔いや高み却りて我は消ゆるがごとし

八十男(やそをとこ)九十媪(くじふをうな)はともしかり寿命果てなむ六十路男(を)われには

入院しガンの行く末おもふときたづきも知らぬ国はあらはる

この疼き仮庵(かりほ)盲にやわかるまい切羽詰まらにや祈りもすまい

祈りさへ孤独の中に凍りつく儘の人生おはりにながむ

避難所の寄せ暮し堪へがたきとぞ病院相部屋ひとしかりけり

相部屋の人の相克終までも弊のすさびの死の床までも

俗世まま好悪さらしてなにしようぞ互ひガンなり
いとどしく憂し

あなにやし弾かるる身は終までも四人の部屋に三人仇

弱きもの汝その名は男なりやまひのまへにおのれ
たもてず

間もおかずナースコールを押し続く稚児にかへり
しガンの丈夫(ひと)かな

サンライズ、サンセット、ミュージカルならぬこや
入院の単調の日々

三界の火宅はなれてやすめるに病院暮しのなにした
へがたき

壁にさへはた言問ふや独り身を処しかねてをり病
院暮し

悲しびが子供のやうに離れないガンのわざかなこ
ころもどしぬ

廊下行く点滴人間われを見て坊やおどろき目を丸
くする

あしたよりまめだち働く庭師には病窓われをいか
に見るらむ

病窓の内はよどみて表沓ゆ同じ人界(かい)ともお
もはれぬかな

をかしかる曇空(そら)など見ればなにやらむタブ
ローにほふ一瞬のあり

(※私は絵描きです)

ひさかたのひかりかげりて雲ぞ湧くひとあめふれ
ば嬉しか悲しか

病窓ゆ見れば一面雪景色雪とたはむる人らはしきも

いたつきのゆゑに断ちにシタバコ点く久しき味の服毒と知り

間遠の火くゆらせをれば咳ともに点滴痛む冬の風烏澁や

この冬ゆ日本の西へかたむくべし豪雪積もりて津波流せば

湯島なる梅は咲くらむ病床ゆ我魂(わがぐ)いざなへ白梅太鼓

いつの世も東大生らはともしかり湯島キャンパスお蔭力ぞ

弥生冴へただのひと日に春一番こほらぬうちに女神つと逃ぐ

己が世を惜しみ愛しみ憚らずはいたらぬそれと残世尽くせよ

つねえくぼ消ゆる間もなき柔顔をひとにしめせば本懐本懐

ガン越えて働かむただうち沈み残世すぐせば悲しからまし

〔和歌集蛇足〕二〇二二年ガン発覚。すでに結構なステージで(手術をせねば)余命数か月と宣告され頭真つ白。しかしこうなったのも「うべなるかな」で、一日二十四時間、一年三百六十五日、私は睡眠妨害と、脅しと、罵りの中に十六年間生きて来たのです(今もそうです)。私は団地住いで四階に居ますが廻り四部屋とるりとヤクザ(※ストーカー、経緯は前号をお読みなさい)に囲まれています。心身にわたるストレスの末にガンとなりました。睡眠不足で仕事続かず、貯金も使い果たしたころのことで、ほとほと困りました。老人にいたる今まですべてを独り身で過して来、その為でしようか社会的な知識に疎く、保証人がいなければ入院ができません

いことも知りませんでした。致し方なく、十年以上でしたか
音信もしなかつた姉に電話をし、助けてもらったのです。そ
の後の入院生活も支えてもらいました。かかる事情だったと
は云え、男一匹の身、なさけない限りです。

万事あざなう苦ばかりの仕儀だったのですが、しかし「死
ぬ」ということを肌感覚で感じ、以後俗に云う「終活」に目
覚めました。心身 にわたる終活です。その辺の件を次回
の「風吹かず(二)」で御披露したいと思います。よろしく
どうぞ。

(追)十八年間の長きにわたり睡眠妨害 生活妨害をし続け、
入院に至らしめたばかりか、剩え退院以後の今にいたるまで
蛮行を続けている輩を、私は許しません。私の窮余の様をこ
いつらは、楽しんで、いるのです。働くこともせず、遊び呆
けたまままで…。



病院廊下。点滴を付け、手術後必死にリハビリ歩行をしました… (photoAC より借用)